

上海東洋学館と「興亜」意識の変化——杉田定一を中心に——

熟 美 保 子

はじめに

一九世紀末、最も近い外国である中国へ日本人が盛んに進出しはじめ、そこで様々な交流がもたれたが、教育の分野においても同様であった。

一九〇〇年から一九四六年にかけて上海に設けられた東亜同文書院の存在は、近代の日中関係において知られたところである。しかし、その一五年前に設立された日本人が経営する最初の学校、東洋学館についてはどうだろうか。『対支回顧録』を見ると、中国における日本の教育施設の冒頭に東洋学館が取り上げられてはいるものの、曖昧な形

での紹介に留まるのみで実態は明らかでない。<sup>(1)</sup>すなわち、近代日中関係史において注目されることはほとんどなかったと言つてよい。

そのため、東洋学館を中心に取上げた研究も限られたものになっている。一八八四（明治一七）年の清仏戦争時に、中国に在住した日本人の間で「福州組事件」が画策された。まず、それに関わった人物のその後の動向を明らかにした田中正俊の先駆的研究がある。<sup>(2)</sup>これによって、一部の者は東洋学館の経営に参加、あるいは入学していることがわかった。次に佐々博雄は、東洋学館の設立から解散に至るまでの一連の過程を明らかにし、設立者の清国観を解

明している<sup>(3)</sup>。中江兆民が東洋学館設立に関与した意図と、その経験が彼のアジア認識に与えた影響については小松裕が論じている<sup>(4)</sup>。汪輝は、末広重恭（鉄腸）がどのような教育論を持って東洋学館に関与したかを研究した<sup>(5)</sup>。最近では、東洋学館館長の職がその後の末広の執筆活動にどのような影響を与えたか、大西仁によって文学の視点を踏まえながら分析されている<sup>(6)</sup>。

ところで、東洋学館は設立二ヶ月にして興亜学館と名称を変更するのだが、これらの研究では一〇月以降の動きに注目されることが多い。しかし最初の経緯や目的にこそ、純粹な設立の意向が読み取れると考える。

そこで本稿では、東洋学館設立当時の動向を明らかにすると同時に、それに関わることによって、一人の自由民権家のアジア認識にどのような変化がみられるかを考察していきたい。

なお、本文中には現在では使用されていない用語も見られるが、史料としてそのまま引用していることをあらかじめ断っておく。

## 一 東洋学館設立をめぐる

### (1) 上海の印象

まず、東洋学館が開設された上海を訪れた人々を見ていこう。イギリスとの間で一八四〇年にアヘン戦争が勃発し、一八四二年に南京条約が締結されて以後、上海はそれまでとは様相を異にしていく。具体的には、一八四三年にイギリス、一八四八年にアメリカ、翌年にフランスが土地を租借し、一八五四年の「土地章程」によって中国政府の管轄から離れた租界（外国人が貿易のために居住するに際し、行政権と警察権が行使可能となる地域）が形成された。すなわち、中国国内に一種の「外国」が作られたのである。

このような上海にいち早く足を踏み入れたのが千歳丸である。一八六二（文久二年）に実情把握の命を受けた千歳丸一行が上海へと派遣された。従者の一人として乗船していた高杉晋作は「此支那第一繁盛津港、欧羅波諸邦商船軍艦数千艘碇泊<sup>(7)</sup>」と、上海についてヨーロッパの軍艦が数多く碇泊する最も活気のある港と評している。

さらに、上海市中の様子も次のように記録している<sup>(8)</sup>。

（前略）津港繁盛といえども、皆外国人商船多き故なり、

城外城裏も、皆外国人の商館多きが故に繁盛するなり、支那人の居所を見るに、多くは貧者にて、その不潔なること難道、あるいは年中船すまいにてあり、ただ富める者、外国人の商館に役せられおる者なり、しかし、城外城裏とも、街市には随分富める商人もおる様子なり、思うに、少しく学力あり、志ある者は、皆北京辺へ去り（後略）

上海が繁盛しているといつてもあくまで一部分で、租界に立派な商館が立ち並ぶのに比べて、中国人の住居の多くは貧しく不潔である。例外的に裕福な者は、やはり外国商館に働いているという。上海における外国商館、ひいては租界の存在の大きさがうかがえる記述である。

なお、この時期は太平天国の乱のために上海も戦場と化していた。「支那兵術不能及西洋銃隊之強堅可知也」と、西洋の武器に中国のものとはかなわないと、西洋文明についても高杉は実感した。このように、半植民地化され戦場となった上海の現状を見たことで、日本も二の舞にならないよう討幕運動を展開していったといわれている。

高杉と共に、従者として千歳丸で上海に渡った納富介次郎も、その時の見聞を「上海雜記」としてまとめている。

「城ノ北方ハ皆英・仏・花旗ノ借地ニシテ洋館立列ス。ソノ内ニ土人モ亦市街ヲ立ツ。然レドモ地租ハ皆洋人ニ納ムルト云フ。」と、上海には租界が形成されつつあった。そこで生活する清国人は、地租をヨーロッパ人に支払わなければならないという。さらに、納富は次のような話も聞いた。「一日城内ヲ徘徊シ日暮ニ臨ンデ帰ラントセシニ、城門既ニ閉ヂテ往来ヲ絶ス。仏人等日本人ト見テ、即チ門ヲ開ケテ通ラシム。然ルニ土人等コレニ乗ジテ通ラントスルニ敢テ許サズ。」と、日暮れに県城内から出ようとする、フランス人は日本人に対しては門を開けて通すが、清国人が一緒に出ようとするのと許可しないという。「嗚呼清国ノ衰弱コ、ニ至ル」と、中国の弱体ぶりに納富は驚きを隠せなかった。

次に上海を訪れた有名な日本人といえば、千歳丸からおよそ一〇年後の岩倉使節団であろう。岩倉具視を大使とする約五〇名の使節団で、一八七二（明治四）年一月からアメリカ・ヨーロッパの一ニヶ国をまわり、その帰途にアフリカとアジアにも寄港した。この間の記録である『米歐回覽実記』には「外国貿易ノタメニ開キタル港ノ内ニ、第一ナル繁昌ノ地ナリ、（中略）河岸ハ外国人ノ居留地ニテ、

道路モ修マリ、屋宇宏壮ナリ」と、上海の様子についても書かれている。高杉と同様に上海の第一印象を「繁昌」と捉え、バンドの重厚な建物群ができあがっていることがわかる。一方、中国文化については「演劇ヲ一覽ス、楽器甚タ麗ナリ、其打扮モ亦巧ミナラス」と、演劇・音楽ともに洗練されていないとの評価である。

ところで、近代日中間の航路は一八六四年の英国汽船会社による横浜・上海間の定期航路開設に端を発する。その後、一八七五年には三菱商会によって、日本の汽船会社による初の海外定期航路となる横浜・上海航路が開かれ、神戸・下関・長崎を経由して週に一回運航された。航路が確立したことによって多くの日本人がアジアへと進出し、中国大陸の玄関口である上海と出会ったのである。

こうして、しだいに日本人居留民が増加し、明治末には数千入、第二次世界大戦直前には一〇万人近くの日本人が上海にいたともいわれている<sup>(14)</sup>。その舞台となったのが上海市虹口区であった(図1)。一八九五年の日清戦争以後、ここにはいわゆる「日本人街」が形成され、魚屋・八百屋・下駄屋など日本人の商店が軒を並べた。ほとんど日本にいるのと変わりがなく、「外国に居ることなど忘れて暮らし

ていた。」<sup>(15)</sup>という。

この虹口地区に日本人が経営する最初の学校、「東洋学館」が開設されたのである(写真1)。次に、東洋学館の設立過程について見ていこう。

## (2) 東洋学館の開設

東洋学館は一八八四(明治一七)年八月七日、虹口乍浦路第二三号館に寄宿舎制で開校した。それまでの日本の中国語教育は日清友好を目的に、あくまで国内でおこなわれていた。しかし彼らの対象とする清国は、あくまで頭の中に描いた理念でしかなかった。そこで現実の清国を体感するため、生徒を日本で募集し、上海で教育をおこなう目的のもとに東洋学館が設けられた<sup>(16)</sup>。

『東洋学館仮規約一覽』(写真2)と題するパンフレットの「緒言」には、主唱者として日下部正一・宗像政・長谷場純孝・杉田定一・和泉邦彦・鈴木昌司・小林樟雄・植木枝盛の八名が挙げられている<sup>(17)</sup>。他にも、中江兆民や栗原亮一などが発起人であった<sup>(18)</sup>。つまり、九州改進黨や自由党などの著名な自由民権運動家が名を連ねているのである。この中の一人、杉田定一が後の貴族院議員時代に、東洋学館

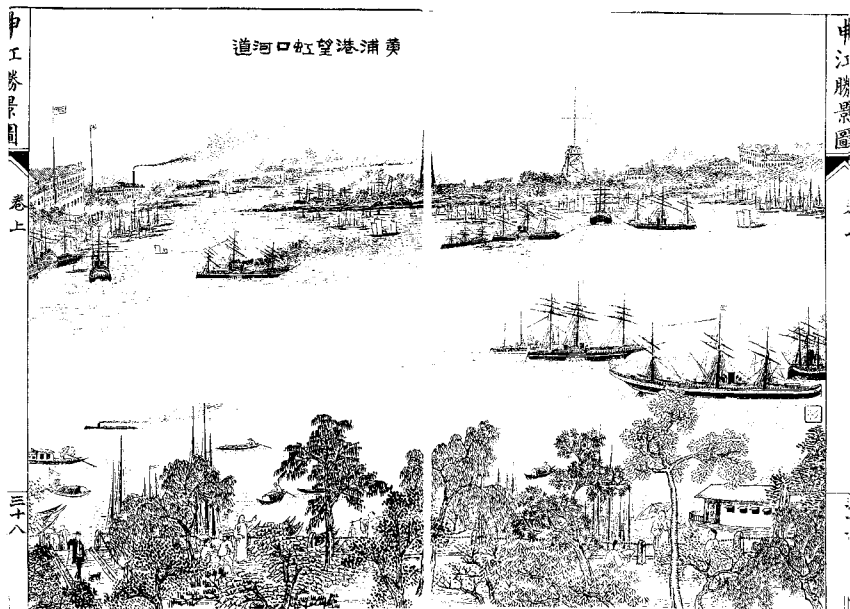


図1 虹口近郊図(関西大学総合図書館所蔵『申江勝景図』より)



写真1 東洋学館趾(著者撮影)



写真2 『東洋学館仮規約一覧』(大阪経済大学図書館所蔵「杉田定一関係文書」25-2)

について「我国に於ける自由民権の思想をして、更に支那大陸に普及せしめ、将来に於て彼地に憲政の実施を見ん事を計れり<sup>(19)</sup>」と書いている。やはり、自由民権運動の一環で設立された学校であることがわかる。

ところで、九州の有志によって東洋学館開校の意見が出されたのは、一八八三(明治一六)年秋にさかのぼる<sup>(20)</sup>。その翌年に、福岡玄洋社社長平岡浩太郎と熊本県人日下部正一が面会し、東洋学館の創立が正式に決定することとなった<sup>(21)</sup>。また、学校運営には莫大な資金が必要となるわけで、

「海舟日記」の明治一七年八月二五日の条には「(中江篤介―著者)中井得介、今一人、支那へ学校建て候につき、金子借用の事」と記されている<sup>(22)</sup>。発起人の一人である中江兆民は、勝海舟に借金するなど東洋学館の資金調達に奔走していたようだ。なお、具体的な運営については、実際に上海に赴いた日下部正一・宗像政・長谷場純孝らがあつている<sup>(23)</sup>。

もちろん、学校である以上は生徒がいなければ始まらない。そこで八月二四日の『朝野新聞』に生徒募集の広告を出すこととなった(図2)。その結果、「東洋学館ナル者ヲ上海ニ設ケ、許多ノ生徒ヲ我が国内ニ募集シ、最初之ニ応ズル者ハ僅々数フベキニ過ギザリシガ、清仏開戦ノ報告」ア



リシヨリ、世ノ書生ヲシテ支那ニ赴カントスルノ熱心ヲ發セシメ、此ノ学館ノ生徒タラントスル者、日ニ其ノ數ヲ增加セリ<sup>(24)</sup>と、最初は少数であつたが、清仏戦争を契機に徐々に応募者が増えている状況がうかがえる。

ところが、大望を抱いて留学した者たちの思惑は大きくはずれることになった。「上海東洋学館の事ハ豫て諸新聞紙にて披露されたれども、同地にてハ殆ど学校の所在を知るものも無き程なれば、名を聞きて来航し失望するものも有らんと同地よりの書翰にも見えしが、右ハ前々館員にて計画中用意の未だ調ハざるに已に本国を發するものあり<sup>(25)</sup>」と、上海では東洋学館の存在は知られておらず、学校としての準備も調っていないために、せつかく渡航しても失望する留学生が多かつた<sup>(26)</sup>。

さらに十一月九日の『朝野新聞』の「雑報」欄には「東洋学館ハ一時上海に於て不評判を極め、学校ハ有名無実にて生徒も四方に散乱する有様となり、少年子弟の

今校支那上海に於て東洋学館設立留學を望むるの諸君其手練等左の處迄御照會下度候  
明治十七年八月 東京芝罘房町五番地鶴鳴樓内  
和泉邦彦 宗像政 長谷城純孝

前途を誤まるのみならず、自然我国の名誉にも関係する事なれば、領事より至急差留めの儀を政府へ上申せられし程なり」と書かれている。すなわち、東洋学館の評判は悪く、生徒の出席率も低かつたようだ。民間の学校である東洋学館は、上海にいる日本人の目に余る状態のため、駐在領事から日本政府に対して差し止めの上申が出される始末であつた。その原因として「是れまで仮り学館のある場所ハ売淫女の巢窟にて、書生の風俗を悪くする恐れ」と、風紀上良い立地ではなかつたことが挙げられている。実際に、呉淞路・乍浦路・海寧路一帯は劇場やバー・ダンスホールなどの娯楽場が集中していた<sup>(27)</sup>。とうとう、東洋学館は末広鉄腸を館長に迎え、場所と名称を変えて再建の必要に迫られることになった。しかし「興亜学館」・「亜細亜学館」と改名したものの、政府の認可を得られず支援も受けられな

いまま、財政難などの理由で一八八五(明治一八)年九月三日に閉校となつた。

ちなみに、一八八三年一二月には徴兵令が改正されている。館長である末広鉄腸自身も「徴兵ヲ忌避スル者ノ為ニ」と表現しているように<sup>(28)</sup>、もともと東洋学館には、設立者側にも入学者側にも徴兵逃れのための方策という思惑も

あつたよう<sup>(29)</sup>だ。このように純粹な学問探究を求める生徒ばかりではなかつた点も、一年での閉校に影響しているのだらう。

### (3) 東洋学館の設立意図と規約

東洋学館はどのような意図のもとで設立された学校なのだらうか。まず、一八八四(明治一七)年七月付けで発表された「東洋学館趣意書」から見てみよう。<sup>(30)</sup>

#### 東洋学館趣意書

(前略) 我国ニシテ永ク独立ノ體面ヲ完ウセント欲セハ、東洋政策ノ得否ニ注思セサル可ラス、蓋シ東洋ノ神髓ハ清國ノ頭上ニ在テ存スル者ニシテ、我國トノ關係ヲ論セハ即チ輔車相倚リ唇齒相保ツノ大要アル也、苟モ志士ヲ以テ任スル者茲ニ主眼ヲ置カスシテ可ナラムヤ。吾輩ハ怪ムニ不堪方今外交ノ要ヲ論シ、且ツ海外ニ留学スル者欧米天地ヲ指スモ近接不可離ノ清國ニ至テハ寥トシテ聞ユルナシ、是レ洵ニ一大欠典ナラスヤ、我輩ハ先ツ清國ノ政治・人情・風俗・言語等二通曉シ、所謂神髓手足ヲ活動スルノ妙ヲ知ルヲ必要ナリト信シ、茲ニ一大学校ヲ設ケ大成有為ノ人士ヲ養成シ、

遂ニ將サニ長江一浮千里進テ東洋ノ衰運ヲ挽回セントスルナリ、之ヲ記ス、清國上海ハ即チ、東洋ノ咽喉ニシテ金穀ノ輻マル所、人材ノ來タル所、我國ヲ隔ツル遠キニ非ズ、一棹至リ易キ地ナルヲ以テ此ニ校舎ヲ置ク、江湖同感ノ士來リ学へ、是レハ此レ真正ニ報國ノ本色規約ハ載セテ別紙ニ在リ。

清國上海

明治十七年七月

東洋学館

ここから読み取れるポイントは次の通りである。①清國と日本は「唇齒輔車」、すなわち車と車軸や唇と齒のように、とても近くて密接な必要不可欠の關係である。②日本からの海外留学先は欧米が中心で、「唇齒輔車」であるはずの清國に行く者はいない。③東洋の衰運を挽回するため、清國の政治・人情・風俗・言語等に長けた人材の育成が、東洋学館の設立目的である。④上海に設置した理由は、東洋の急所(咽喉)として金品が集まり、人材が訪れる日本にとつて最も近い中國の都市だからである。

このように、東洋学館には欧米に対する日本と清國の協調路線、ひいては「興亜」の姿勢さえも感じられる。このことは、一八八四(明治一七)年八月に出された『東洋学館



仮規約一覽』の「緒言」に記された「其ノ趣意タルヤ大二

東洋ノ衰運ヲ挽回シテ、以テ泰西諸邦ト衡ヲ世界ニ争ヒ、

遠ク威光ヲ洋外ニ発揚スルニ在ル」との言葉からもうかが

えるだろう。<sup>31)</sup>

ところで、『東洋学館仮規約一覽』には「東洋学館章程」

と「東洋学館課程概略」が書かれており、その内規がわか

る。「東洋学館章程」は全一〇条で構成されているが、そ

の一部をここに紹介しよう。

第一條 本館ハ清国上海虹口乍浦路第二十三号館ニ設

置ス

第二條 本館ハ主トシテ支那学ヲ教ヘ、兼ネテ政治経

済学、理学、哲学、商法学、諸科ノ中一科ノ専門学

ヲ授ケ、尚ホ以上専攻ノ為メ、英、仏、独逸、拉丁

ノ諸学ヲ教授スル者トス

但シ学科及ビ館則等ハ之ヲ別紙ニ讓ル

第三條 本館ノ生徒ハ總テ館内ニ寄宿スル者トス

第四條 本館ハ事務局ヲ東京・大坂・長崎ノ三所ニ設

ケ置クベシ

東京事務局 京橋区銀坐二丁目十四番地

大坂事務局 未定

長崎事務局 長崎区銅坐町二十二番戸

(後略)

これによると、東洋学館は日本人が多く住む共同租界の

虹口地区に設置され(第一條)、「支那学」を中心に政治経

済・理学・哲学・商法などの専門に分かれ、英語・フラン

ス語・ドイツ語・ラテン語などの語学が教授される(第二

條)。また、東洋学館は全寮制(第三條)で、東京・大阪・

長崎に日本側の事務所を構える段取りとなっていた(第四

條)。なお、第五条から第一〇条には、年間六〇ドルの学

資金が授業料と食費にあてられること、その納入方法や保

証人の必要性などが記されている。<sup>32)</sup>

次に、具体的なカリキュラムについて「東洋学館課程概

略」の部分より見ていこう。

第一條 本館専攻スル所ノ課程ヲ分テ五門トス、乃チ

次ノ如シ

第一 政治経済学 附支那学

第二 法律学 附同上

第三 商法学 附同上

第四 理学

第五 哲学

表1 開設当時の東洋学館カリキュラム

課程	専 門	卒業年限	級	授 業 科 目
予科		2年	第2級	中国語学、英語学、日本史、中国史、万国史、英国史、数学
			第1級	中国語学、英語学、仏国史、米国史、経済学初歩、代数学、幾何学
専攻	商法学	3年	第1年級	中国語学、英語学、算算、暗算、洋算、簿記学原義、簿記術実験、日本商業手続、経済原論
			第2年級	中国文学、英文学、簿記各体、銀行論、中国商業手続、法律原論、英国商法
			第3年級	中国文学、英文学、英国商法、仏国商法、商業史、貿易実践、万国公法私法大略
	政治経済学	4年	第1年級	中国文学、英文学、経済原論、論理学、ローマ史、欧州立憲史、ギリシア史、文明史
			第2年級	中国文学、英文学、英国憲法史、国法学、フランス語或いはドイツ語学
			第3年級	中国文学、英文学、銀行論、行政学、英国憲法、万国公法、法律原論、フランス或いはドイツ語学
			第4年級	中国文学、英文学、租税論、財政論、貨幣論、万国私法、法論
	法律学	4年	第1年級	中国文学、英文学、法律原論、英国民事法律、仏国刑法、日本刑法、論理学、フランス語学
			第2年級	中国文学、英文学、英国民事法律、仏国民法、日本治罪法、フランス語学
			第3年級	中国文学、英文学、英国民事法律、英国証拠法、仏国民法、ラテン語
			第4年級	中国文学、英文学、法論、ローマ法律、仏国商法、英国憲法論

注1：「文書」25-2より作成。

2：表記については、できる限り現代的なものに改めている。

但シ理学、哲学専門ハ当分ノ内  
 教授セズ

第二條 専門学講究便利ノ為メ予科  
 ヲ設ケ、二年間予科修業ニ従事セ  
 シム

但シ予科生ニハ主トシテ支那語  
 学、英語学ヲ教授ス

第三條 一科講究ノ時限中ハ他ノ学  
 科ヲ兼修スルヲ許サス

第四條 専門学科講究ノ期ヲ四年ト  
 為シ、一級ヲ一年ト為ス

但シ商法学専攻ハ三年間ヲ以テ  
 満期卒業トス

第五條 本館生徒入学ノ初ヨリ本科  
 ニ入ラントスルモノハ、其課スル  
 所ノ試験ニ及第スルヲ要ス

第六條 本館各級成業ヲ一年ト為シ、  
 毎年七月試験ヲ為シ試験合格スル  
 モノハ及第セシメ、不合格ノモノ  
 ハ落第生ト為シ再ビ前修業ノ科ヲ

## 修メシム

(後略)

ここから明らかとなる東洋学館の特徴は以下の通りである。①専攻課程は政治経済学、法律学、商法学、理学、哲学の五つの専門だが、理学と哲学については当分開講しない。②専攻課程の前に中国語・英語を中心に学ぶ予科が設けられている。③商法学は三年、それ以外は四年で卒業となる。④専攻課程から入学しようとする場合は、試験に合格しなければならぬ。⑤毎年七月の試験で合格すれば進級となり、不合格の場合は再履修の必要がある。

なお、第七条には具体的な授業科目が記されているので表1として挙げておいた。どの課程にあっても中国語や中国文学が設定されていることから、やはり中国に通じた人材の養成という目的が反映していることがわかる。また、当時の上海は欧米人が租界を形成し、ある種、貿易センターの様相も呈し始めている。よって、各国の語学や法律なども習得できるよう準備されたのだろう。

## 二 東洋学館がもたらしたもの

あいにく一年で閉校となった東洋学館だが、その後の中

国における日本人の活動には少なからず影響を与えることとなった。<sup>(33)</sup> 畑中ひろ子によると、荒尾精が一八八六年から一八八九年に清国に滞在していた間、楽善堂(一八七七年に東京銀座で開店した薬の製造・販売をおこなう店舗)の支店として、漢口楽善堂の店舗が開かれた。<sup>(34)</sup> そこには東洋学館で学んだ青年たちも集まり、中国各地の情報収集や調査研究をおこなったという。この漢口楽善堂から一八九〇年に開校した日清貿易研究所(図3)、そしてそれを前身とする東亜同文書院という、日本の中国政策の流れがつけられていくことになる。

それでは、具体的な東洋学館の影響とはどのようなものだったのだろうか。開校に携わった一人である杉田定一に焦点をあて、上海渡航前後の彼の思考の変化から考えていきたい。

### (一) 渡航前の杉田の意識

杉田定一は一八五四(嘉永四)年に福井で生まれ、成人して後は民権活動に身を投じていく。そして第一回衆議院選挙から当選をはたし、北海道長官や衆議院議長をつとめするなど政治家としての道を歩んでいった。大阪経済大学図



図3 日清貿易研究所開所式の競争風景(関西大学総合図書館所蔵『點石齋畫報』戌集一より)

書館で所蔵する「杉田定一関係文書」には、東洋学館設立以前の著述である『興亜小言』と『興亜策』が収められている。これらを通して、上海渡航直前に杉田がどのように考えていたかを確認する必要がある。まず、『興亜小言』から見ていこう。<sup>(35)</sup>

(前略) 亞細亞ハ恰モ英・魯ノ野心ヲ逞シ、覇業ヲ賭スルノ競馬場ノ如ク、加フルニ近頃彼安南ハ仏ノ為メニ破碎セラレ、城下ノ盟ヲ為シ、東洋ノ羞辱日ニ一日之ヲ重ネ、黄色人種ハ將ニ白色人種ニ咬ミ尽サレントス、夙ニ聞ク、彼ハ自由ヲ愛シ平等ヲ好ムト、今其自由ヲ愛シ平等ヲ好ムノ手ヲ以テ、却テ他人ノ自由ヲ殺ギ平等ヲ剝グトハ、嗚呼抑モ何ノ心ゾヤ、假令彼自由ノ保護者ヲ以テ自ラ誇称スルモ、吾輩ハ寧自由ノ破壊者ト評セザルヲ得ズ、之ニ反シ我亞細亞ノ諸邦タル唇齒相依、輔車相接スルノ親アルニモ係ハラズ、個々分離異域万里ノ思ヲ為シ、毫モ同種相憐ミ同厄相救フノ念ナク(後略)

注目すべき点として欧米については、自由を求める国でありながらアジアの自由を奪っていると非難し、「自由の破壊者」とも評価している。さらにアジアの状況について

は、それぞれがバラバラで互いに助け合うという事がなく、欧米人に侵略されつつある状況を嘆いている。

それでも「唇齒相依、輔車相接スル」の言葉からも、日本と清国は必要不可欠で協力し合うものと杉田は認識している。そして「夫合スレバ強ク、離ルレバ弱キハ自然ノ勢、一枝ノ枝折ルベキモ束ネテ十枝ニ至レバ容易ニ折リガタク、千百鳥合ノ土寇モ編製以テ隊伍ト為セバ用ニ供スベシ、誰カ聯合ヲ無用ナリト云フヤ」と、アジアの国々を枝にたとえて、それぞれ個々の力は小さくてもあわせることで強固になると、連合の必要性を説いている。

あくまでもこの時の杉田には、欧米への対抗策として日清協調論的意識があったといえる。

一八八三（明治一六）年八月に書かれた『興亜小言』を修正し、翌年の春に公のものとしたのが『興亜策』である。<sup>36</sup>

この中で「自主・自由ノ大義ヲ宇内ニ拡充スルニ在リ」と、自主・自由の原則を広める必要があり、その方法として「知識交換」・「体育」・「団結」を挙げている。具体的には次の手段となる。

（前略）知識交換如何、曰ク道路ノ便ヲ開キ交通往来ヲ盛ニス、曰ク各国ノ語学ヲ開ク、曰ク新聞紙ヲ興ス、

曰ク出版会社ヲ設ケ著述ヲ盛ニスヨリ学校ヲ興ス、曰ク政談演説ヲ盛ニシ輿論ヲ振作ス（後略）

「知識交換」については①道路を整備し交通を活発にすること、②語学を進めること、③新聞紙をつくること、④出版社を設立し、著作活動を盛んにして学校を建設すること、⑤政談演説を活発にし、世論を奮い立たせることなどが書かれている。杉田は知識の交換方法の一つとして学校建設を考えており、東洋学館に関わったのもそのあたりが影響していると思われる。

「体育」は「操錬ニ撃劍ニ彈射ニ武技ヲ磨鍊シ」と、武芸を磨いて体力を強固にするなど、身体の育成について述べられている。さらに「団結」については「各邦ニ人民集合同会社ヲ設立シ、緩急相助ケ、苦楽相均シ、協同一致ノ風ヲ盛ニス」と、人々が集まり会社など共同のグループを設立することを挙げている。

## （2）清国渡航による杉田の意識変化

まず、杉田定一の海外における足取りについて表2に示しておこう。彼はアジアだけでなく欧米も度々訪れており、その目的は視察など政治家として公的使命を帯びたもので

表2 杉田定一の海外動向

西暦	和暦	月 日	動 向
1884	明治17	8月30日	東京出発
		9月6日	長崎港出航
		9月8日	上海上陸
		9月26日	芝罘到着
		9月27日	太沽到着
		9月30日	蔡村宿泊
		10月10日	円明園などを見学
		10月14日	万里の長城に登る
		10月半ば	北京を出発し中国東北部へ
		10月30日	上海の復新園で送別会を催され帰国
1886	明治19	6月20日	福井出発
		7月22日	横浜よりアメリカへ向けて出発
		8月8日	サンフランシスコ到着
		11月6日	ニューヨークを出発
		11月12日	リバプールをへてロンドンに到着
1888	明治21	4月2日	ロンドンを出発してパリへ
		4月20日	パリからベルリンへ
		5月2日	パリに戻る
		5月18日	パリからマルセイユへ
		6月26日	馬関到着
		6月27日	横浜へ帰国
1896	明治29	6月26日	横浜を出航しアメリカ・ヨーロッパを視察
		10月25日	マルセイユを出航し帰国
1900	明治33	6月30日	横浜を出航しマルセイユに上陸、リヨンへ立ち寄りパリへ
		11月10日	ロシア・オーストリア・イギリス・アメリカとまわる
		12月23日	ハワイホノルル到着 横浜に帰港
1908	明治38		日露戦争を受けて、満洲朝鮮視察をおこなう
1915	明治45	5月30日	中国・朝鮮視察のため東京出発
		6月4日	上海到着
		6月6日	蘇州・南京到着(8日出発)
		6月11日	漢口到着(14日出発)
		6月15日	北京到着(19日出発)
		6月19日	天津到着(21日出発)
		6月23日	大連到着(25日出発)
		6月26日	ハルビン到着(27日出発)
		6月28日	撫順・奉天到着(1日出発)
		7月1日	安東縣到着(2日出発)
		7月2日	京城到着(5日出発)
		7月7日	釜山出港
		7月9日	東京に戻る

典拠：『文書』7-1-2、28-128、28-135-25、28-137-20-1、『月刊政友』第143号(1912年)、雑誌博愛『杉田鶴山翁』(鶴山会、1928年)



あった。その中でも東洋学館開校に伴う清国渡航は、彼にとつて初の海外経験となった。

杉田は一八八四（明治一七）年九月六日に、長崎から上海に向けて出港した。その前月、彼ははず子夫人と結婚している。同じく一八八四年八月には、アジア進出を始めるフランス艦隊が台湾を封鎖し、清仏間でベトナムの領有をめぐって全面戦争が開始された。杉田にはこの清仏戦争が東洋の自由・独立にどのような影響を与えるか、実際に中国の様子を見たいという思いがあった。そのため、新婚一ヶ月の身にもかかわらず日本を離れたのである。

こうして杉田は、およそ二ヶ月近くを清国で過ごすこととなった。なお、『朝野新聞』十一月九日の記事には「去月卅日にハ館長代理にて出張せられし山本忠禮氏ハ、小室信介・杉田定一両氏の送別を兼ね上海に在る亜細亞協會會員曾根駿虎氏を始め、許多の人々を有名の復新園に会し支那料理を以て宴会を開き、賓客ハ孰れも此の学校の盛大に至るべきを祝されし」と書かれている。杉田は北京など中国北部を廻って再び上海に戻り、一〇月三〇日に小室信介と共に、当時名の知れた復新園にて中華料理による送別会を催されたようだ。この時の彼の思いは、はたしてどのような

ものだったのだろうか。

ところで杉田は、上海でいくつかのショッキングな体験をしている。まず一つ目は、清国の学生を実際に見たことである。先にも見たように杉田が上海を訪れた一番の目的は、人材養成を目的とする東洋学館の教育制度を確固たるものにするためである。そこで、清国の有名な教育者である張煥倫と面会した。『東亜先覚志士記伝』の「杉田定一」欄には、当時の感想が次のように記されている。<sup>37)</sup>

（前略）彼が始めて上海に入るや、全く支那の事情に通ぜず、且つ一人の知己をも有しなかつたので、当時支那の有名なる教育家として声名のあつた張煥倫を訪問し、国難に対する見舞を述べ、東亜将来の経綸に対する意見を披瀝して、将来亜細亞の独立のために有為なる人材を造ることが当今の急務であり、且つ永遠の大計である所以を熱論した。之に対し張煥倫は遠来の労を謝し、彼を案内して自己の教育せる学生二百余名を集めて得意気に其の訓練を見学せしめたが、其の担いでいる二百余挺の鉄砲は廢物同然で到底役に立つとは思われなかつた。而かも張煥倫は昂然として、之を以て百萬の甲兵にも当り得るが如き口吻であつたから、

彼は愈々其の抱負とする新組織の学校を設立し、新時代の教育を與へて之を警醒せしむる必要を痛感（後略）

すなわち、張煥倫の案内によつて二〇〇名余りの学生の訓練風景を見学した杉田は、あまり役に立たないだろうとの率直な感想を抱いた。この経験は、彼に清国の教育の無意味さを実感させることになったのである。

さらに杉田は、上海で次のような体験もした。「当時吾人が上海に入つて最も驚いたことは、一夕飄然として、市街の公園に入らうとすると、その入口に『支那人入る可からず』といふ立札が立てられてあるではないか。乃ち且は慨然として白人の専横を憤り、且つは悄乎として清朝の衰運を哭した<sup>(38)</sup>」という。異国にありながら中国人を排斥する欧米人と、それを受け入れざるを得ない中国の状況が、彼に驚きとともに衝撃を与えたのである。

同様の体験は北京においてもあった。杉田は上海に一〇日あまり滞在した後、煙台や太沽を経て九月三〇日に北京に到着した。この間の滞在記録として、『遊清雜唸』<sup>(39)</sup>がある。これを見ると、杉田は円明園や万里の長城などを見学してまわつたようだ。円明園は一八世紀半ばに完成した北

京郊外にある離宮だが、一八五六年の第二次アヘン戦争で「廢墟となり現在に至っている。「火三日不絶」と英仏の兵によつて焼き尽くされた清朝全盛期の遺構を目の当たりにし、杉田は一言、「遺憾」との感想を述べている。

このような上海・北京での体験は杉田の思考にどのような影響を与えたのだろうか。一八八四（明治一七）年に記した『遊清餘感』<sup>(40)</sup>から見ていこう。杉田は「上海ノ地タル各国居留地ニシテ、半欧半清支那ノ大勢ヲ知ルニ足ラズ」と、上海はすでに半分西洋となつているので中国そのものの現状を知るために北京へと移動した。結果、次のような感想を持つた。

（前略）其ノ制度、風俗、人情ノ在ル所ヲ見聞スルニ、  
全ク平生書籍ヲ讀ミ、詩文ニ看ル所ト霄壤ノ差アリ。  
抑モ彼ノ祖先、康熙・乾隆、歴代ノ治乱興廢ヲ監ガミ、  
制度・法律ヲ建設シタルモ、今也腐敗紊乱、紀綱振ハ  
ズ、賄路公行、進士及第ノ設アルモ、其学ブ所ノ書四  
書六経ノミニシテ欧羅巴ノ書ニ涉ラズ、故ニ字内ノ事  
情ニ疎ク（後略）

清国に渡つてみると、あらかじめ書籍や詩文などから得ていた情報とは異なる有様であった。康熙・乾隆という清

朝の大發展期から比べてすでに荒廢しており、制度や法律は腐敗し、綱紀は弛み、賄賂が横行している。そして學者たちは中国の古典を学ぶばかりで、ヨーロッパの書籍を読まないために現状に疎くなつてゐるという。實際に、この頃の中国国内には哥老会など様々な秘密結社ができており、杉田も「公利公益ヲ重ズルノ心ナク」と、私利私欲に走つてゐる状況を述べてゐる。

さらに『遊清餘感』ではこのようにも語つてゐる。

(前略) 論者或ハ云フ、支那ハ唇齒輔車ノ国ナリ、宜ク親ムベシ敵視スベカラズト、是其ノ一ヲ知テニヲ知ラザル者ナリ、論者ノ云フ如ク、其ノ地形ハ唇齒輔者タルモ、其ノ人類ハ頑冥執拗ニシテ、文明各国ノ惡ム所ニシテ、固ヨリ親ムベカラザルモノナリ、況ンヤ琉球ノ件・台湾ノ事、彼常ニ好意ヲ以ツテ我ヲ迎ヘザルニ於テヲヤ、若シ此ノ時機ニ乗セズ、中原ノ鹿一旦白人ノ掌中ニ落チケレバ、其ノ所得ノ地、鉄道敷クベシ電線架スベシ軍艦設ク可ク、旧日ノ支那ハ變ジテ新成ノ歐羅巴トナルベシ、其ノ時ニ臨ミ垂涎百尺スルモ固ヨリ及ビ難ク、且ツ我邦ハ東洋開花ノ魁ナリト自称セント欲スルモ恐クハ得ガタカラン(後略)

すなわち、日清の関係が「唇齒輔車」で親しくすべきという人がいるが、それは実態を深く知らないからだ。あくまで地理的には近いが、人々の性質は頑固でしつこく、文化は好ましいものではなく親しくすべきではない。その上、琉球・台湾問題では清国は日本に好意を示さなかつた。しかし清国が欧米の手に落ちてしまうと、鉄道が敷かれ、電線が架けられ、軍艦も配備され、伝統的な中国は失われて新たなヨーロッパとなつてしまふだろう。その時になつて日本が求めても得ることは出来ないと思つてゐる。

渡航前に杉田が『興亜小言』や『興亜策』で述べていたような、お互いに補い合う密接な関係との考えからはかけ離れてゐる。協調路線ではなく、むしろ取り込む対象として清国を認識し始めていることがうかがえる。

### おわりに

本論を通じて、次の点が明らかとなつた。第一に、初期の東洋学館は中国だけでなく、欧米の語学や法律などもカリキュラムに含まれてゐる。上海という土地柄から、中国・欧米両方に通じた人材を育成しようとしていた。第二に、東洋学館に携わつた杉田定一だが、中国渡航前後では

その意識が大きく変化することになった。

ところでこの時期は、政治家や知識人が欧米やアジアに関して様々な意見を表現した時代でもある。例えば、遅れた東洋と手を切り日本は西洋化していかなければならないとする、有名な福沢諭吉の「脱亜論」も一八八五（明治一八）年の三月である。杉田のものちに「東洋論」なる演説をおこない「東土ノ氣運ヲ挽回シ、西方ノ強盛ニ拮抗シ」と述べたり、中国だけでなくインドも含めた東アジア全体を行く末について、『東洋自由振起論』を執筆している。<sup>(43)</sup>

これらの内容には、欧米における杉田の異文化体験も大きく影響しているだろう。例えば、一八八七（明治二〇）年四月二二日付でイギリスから福井の妻にあてた手紙には、「ここでは大人も子どもも公園で毎日運動しており、日本人は運動が足りないから弱いのだ」と書かれている。<sup>(44)</sup> 日本人と欧米人の体力の違いについて原因を分析し、「小児ノ時ヨリ注意ガ肝要」と促している。

また、同年一二月一四日にロンドンから福井の父へあてた手紙には「欧州ハ概シテ十二月ノ廿五日をクリストマスと唱へ、此日ヲ以テ新年元日ノ如ク儀式ヲ為シ、一月一日ニハ別段何ニモ無之ガ其風俗ナル」と記されている。<sup>(45)</sup> ヨー

ロッパでは元日よりクリスマスを重視すると、日本との年末年始の違いについて報告している。さらに一八九六（明治一九）年八月には、サンフランシスコからロッキー山脈を越えてカナダ領トロントに行き、ナイアガラの滝も観ている。

以上のような欧米での海外経験が、反面教師のごとく杉田のアジア認識をより深めることになったのは間違いない。しかし、本論では紙幅の関係上、一八八四年以後については述べることができなかつた。また、中国における日本の教育政策を考える上で、東洋学館の再建以後の動向も重要である。今後の課題としておきたい。

（依頼原稿）

- (1) 東亜同文会編『対支回顧録』上巻（原書房、一九六八年）六九八頁。上海における日本人社会の教育や宗教について、小島勝・馬洪林編『上海の日本人社会―戦前の文化・宗教・教育―』（永田文昌堂、一九九九年）があるが、この中では東洋学館については一切触れられていない。

- (2) 田中正俊「清仏戦争と日本人の中国観」（『思想』第五一二号、一九六七年）。

- (3) 佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」（『国士館

大学文学部人文学会紀要』第二二号、一九八〇年。

(4) 小松裕「中江兆民とそのアジア認識—東洋学館・義勇軍結成運動との関連で—」〔歴史評論〕第三七九号、一九八一年。

(5) 汪輝「東洋学館における中国人教育」〔教育学研究紀要〕第四四卷、一九九八年。

(6) 大西仁「未来を想像する意味について—末広鉄腸『雪中梅』と東洋学館をめぐって—」〔論究日本文学〕第八〇号、二〇〇四年。

(7) 「遊清五録」〔高杉晋作全集〕下巻、新人物往来社、一九七四年) 一四四頁。

(8) 同右、一八五頁。

(9) 同右、一四九頁。

(10) 「上海雜記」〔幕末明治中国見聞録集成〕第一卷(ゆまに書房、一九九七年) 一五頁。

(11) 同右、三九頁。

(12) 久米邦武編・田中彰校注「特命全權大使米欧回覽実記」五(岩波書店、一九八五年) 三三二頁。

(13) 同右、三三四頁。

(14) 上海における日本人居留民社会の形成に関する最近の研究として、陳祖恩「西洋上海と日本人居留民社会」(神奈川県人文学研究所編「中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海—」御茶の水書房、二〇〇六年) があ

(15) 高橋孝助・古廐忠夫編「上海史—巨大都市の形成と

人々の営み—」(東方書店、一九九五年) 一二五頁。

(16) 六角恒廣「中国語教育史の研究」(東方書店、一九八八年) 二六六頁。

(17) 大阪経済大学図書館所蔵「杉田定一関係文書」二五—二。以下、この史料群を「文書」と称する。

(18) 黒龍会編「東亜先覚志士記伝」上巻(原書房、一九六六年) 三一九頁。これによると、東洋学館に学んだ生徒として、松本亀太郎・尾本壽太郎・中野熊五郎などが確認できる。

(19) 「支那時局の将来」〔月刊政友〕第一四七号、一九二二年) 一頁。

(20) 「書生ノ方向」〔朝野新聞〕明治一七年一〇月一六日。

(21) 黒龍会編「東亜先覚志士記伝」下巻(原書房、一九六六年) 四六六頁。

(22) 勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編「勝海舟全集」二二巻(勁草書房、一九七三年) 八二頁。

(23) 前掲(16) 二七四頁。

(24) 「戦争モ亦利益アリ」〔朝野新聞〕明治一七年九月七日。

(25) 雑報欄(『朝野新聞』明治一七年一〇月二二日)。

(26) 一八七二年から一九四九年の間、イギリス人によって上海で創設された申報館から新聞「申報」が発行された。しかし、初期の東洋学館については全く掲載されていない。

(27) 「四馬路(現在の福州路)は酒色の街にして、両辺の家

根概ね皆酒樓妓館に非ざるはなく、本邦の醜名を遠く海外に流せる東洋茶館の如き、亦多くは此街に在て開設す。」との記述もあり、四馬路には日本人が経営する多くの娼館があったようだ。尾崎行雄「遊清記」(『幕末明治中国見聞録集成』第三卷(ゆまに書房、一九九七年)五三頁参照。

- (28) 「書生ノ方向」(『朝野新聞』明治一七年一〇月一六日)。  
(29) 前掲(4)七五頁。  
(30) 雑報欄(『朝野新聞』明治一七年八月一四日)。  
(31) のちに東洋学館の館長となる末広鉄腸は、一八八〇年に設立された興亜会の所属である。  
(32) 小松によると、「入館手続きもきわめて簡単で、学費を納入すれば誰でも入館でき、保証人もいらず、入学定員の制限すらなかった」という。前掲(4)七六頁参照。  
(33) 雑賀博愛「杉田鶉山翁」(鶉山會、一九二八年)五八六頁によると、東洋学館の教育は中国での革命に影響を与えたという。  
(34) 畑中ひろ子「漢口樂善堂の人々―大陸浪人の源流―」(『明治大学大学院紀要』政治経済学篇、第二五集三号、一九八七年)。  
(35) 「文書」二五―四。  
(36) 「文書」一六―一〇。  
(37) 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下卷(原書房、一九六六年)七五三頁。  
(38) 「大亜細亞合従論」(『東洋文化』八号、一九二四年)九

頁。

- (39) 「文書」七一―一二。  
(40) 「文書」一六―一一。  
(41) 「脱亜論」(『時事新報』明治一八年三月一六日)。  
(42) 「文書」三八―二九四―一一。  
(43) 「文書」二六―二六。  
(44) 「文書」二八―一三五―三一―一。  
(45) 「文書」二八―一三七―一九―一。

(みのり) みほこ・関西大学非常勤講師、

大阪経済大学日本経済史研究所研究員